

英国ピットマン式速記法が日本へ与えた影響

The Influence for Japanese Shorthand by Pitman system

兼子次生

Tsuguo Kaneko

1. はじめに

日本国は、先進議会制民主主義国の中で唯一、1890年の第一議会から完全な逐語会議録を作成してきた。そのために用いられた日本語の速記技術体系は、西洋文明の影響を強く受けたものであった。日本語速記の開発では英語の速記理論を日本語へ適応させるために設計変更が試みられ、最初に誕生した復画派の田鎖式、英国人が創案した最初の折衷派ガントレット式、官選知事武田千代三郎が創案した最初の単画派武田式、最初の実用単画派と称される中根式へ英国のピットマン式が間接、直接に影響を及ぼした。近代における日本語速記法がどのように発展してきたのかを考えてみたい。

2. 速記法評価の原則と方法

速記は、特定の言語と極めて親密な関係にある。

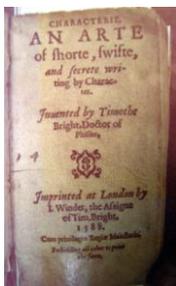
まず大前提として、言語音を視覚的な表象体系によって固定する場合、その速記符号は言葉、音声、意味、正書法とは一切必然的な関係を持たないという考えをとる。筆者は、速記符号が自然な発話を瞬時に固定するという特殊な機能を強調された特殊文字であり、発話行為の流れや広がりの中において、発言内容を再現する上で十分な手がかりとなるものであればよいとの武部説をとっている。(注1)

現在使用されている速記には主に、符号派のほか文字派、機械派があるが、ここで取り上げる速記法は、文字と外見上異なる視覚記号を用いる符号派とする。前2派は手書き速記と呼ばれ、歴史的にはラテン語のティロの速記に起源を持つ文字派から、速記ルネッサンスの英国において近代符号派へと発展し、符号派が現代では速記法の理論体系を高度に完成するに至っているからである。

本論では、ピットマン式速記法（以下ピットマン式）と特徴的な日本語速記法との関係を見る。そのために、初めに、英国速記史の中におけるピットマン式の立ち位置を見て、ピットマン式の全体像を理解する。次に、日本語速記法の中で創案者がピットマン式との関係を認めている田鎖式、ガントレット式、武田式、中根式を取り上げて関係の深さを検証する。日本語の速記法の場合、比較のレベルを基礎アルファベット、五十音符号（基礎符号）とし、(1)濁音、半濁音、促音、鼻音、(2)拗音、長音、(3)助詞、(4)縮記法、(5)省略法、

(6)略語、(7)筆記規則についてはここでは取り上げない。

3. 英国における速記ルネッサンスと近代速記法の完成



速記ルネッサンスは、1588年、英国においてティモシー・ブライト Timothe Bright の「キャラクター」Characterie により始まったとするのが定説であり、早期の速記はラテン文字を用いたロングハンドのスペリングどおり表記する正綴法をとった。ブライトは、「キャラクター」の副題に簡単に、速く、そして記号による秘密の筆記技術 AN ARTE of Short, Swift and Secret writing by Character と記したように、速記の目的として発言を書きとどめることと秘密文字としての効用を掲げていた。

古代から現代に至る速記法研究者の関心の1つは、主に基礎となる速記アルファベットの設計にあった。ラテン文字の代用記号として速記符号は文字の筆記特性を利用しながら、頻度が高い文字に対して簡単な図形を与える傾向が継承され、次第にすべての文字が符号化されていった。その場合、符号化は幾何的な図形をモデルにした幾何派と文字の筆記特性をモデルにした草書派へ分かれていった。

1602年、ジョン・ウイリスのステノグラフィ Stenography は、初めて26文字に対してv、zを除いて簡単な図形を与え、アルファベット速記法の創始者と呼ばれている。(注：History of Shorthand 17p, Pitman)。そのため、ウイリスは一般的に幾何派符号の父とみなされている。ウイリスは、母音の表記に関して加点母音を採用したが、この母音表記法はのちの方式にも採用されている。また接頭辞、接尾辞についても簡単な筆記法を考案し、約200語の略語を設けた。ウイリスはギリシャ語の Stenos と Grafia から Stenography という今日、速記をあらわす万国共通語を造語した。



1641年、ウイリス式を改良したトーマス・シェルトン Thomas Shelton の速記法でも、5文字がロングハンドを用い、正書法の理論を継承している。シェルトン式は、サミュエル・ピープス Samuel Pepys による「ピープスの日記」が書かれた速記法としてよく知られている。母音の書き方について位置による方法を継承したが、最初の母音は筆記するが、中間の母音は書かないなど、筆記量を減らすための工夫が行われていた。



1767年、ジョン・バイロム Jhon Byrom の速記法で子音全部が符号化され、母音は加點によって表象された。その成果をもって、バイロムは英語速記法を大きく進化させた功労者と称されている。バイロムの基礎符号の中で、f、m、n、r、t、vはその後のテイラー式、ピットマン式へと継承されていった。バイロムは、ケンブリッジ大学トリニティカレッジのフェローで学び、ロイヤルソサエティでもあったほか、詩人としても有名であった。バイロムは学習者が学びやすいように、子音を p,b,f,v,s,z,sh,zh や t,d,th(in),th(en),k,g,ch,j、さらには m,n,l,r,h の発音の親近性

に応じて設計し、s,t,r,fに対して方角の異なる直線を配分し、正円の要素をm,n,d,pに割り当てた。また書きやすさ、読みやすさの視点から連綴法にも配慮した。バイロムの速記本は多くの出版社によって発行され、流行した。

1786年、サミュエル・テイラー Samuel Taylor は、符号源素 Diagrams として正円四分割 Quadrants をバイロム式から継承し、テイラー式は簡潔に言えばバイロム式と同じようなものである。しかし、テイラーは、一時代を画する合理的な理論を開発し、その後の英語速記法に大きな影響を与えた。例えば速記線が右下方向や右上方向、あるいは左下方向へどんどん進行する現象をズリと呼んで速記者は嫌うが、バイロムは速記線の基本線帯域内筆記を目指し、また子音の綴りやすさを改善するため、b,h,j,w,x,sh,th に対して2種の符号を与え、また1に3種の符号を与えた。それに対して、テイラーはズリを避けるべきだが、wを除いて子音符号を1個にし、同じ目標の達成を図った。すなわち子音単画化の思想であった。

テイラーはオックスフォード大学などで長年、科学の教員、教授をつとめたが、テイラー式はそれまでの正円幾何派の理論を高度化したものであったことから、その後の英国の速記法へ大きな影響を与えた。

表音主義はウイリスに始まり、その後徐々に高度化されたが、テイラー式を習得したアイザック・ピットマン Isaac Pitman によって完成された。ピットマン式は音声学の知見を基に合理的に設計され、逐語符号速記の理論を完成したとピットマン自身が述べている。



一方、ピットマン式では、母音に関してはアラビア文字のように、子音ストロークの周辺の決まった位置に決まったサインを置くことによってあらかずとともに、速記符号単位を基本となるセンターラインの上中下のどのゾーンに置くかによってあらかず方法がとられた。

4. 英国における正円幾何派の進化

符号派は、文字に対応する符号構成から転換して、筆記運動量を軽減する目的で音素に対して、簡単な幾何図形を配分する戦略へ変化していった。例えばウイリス式では文字の c、q に対応する符号が設定されているが、バイロム式では c は k と同じ符号を配分され、音素に基づいて表記する表音主義が進んでいることがわかる。

またウイリス式、シェルトン式では a、e、o、i、u の母音に対して符号が設定されたが、バイロム式以降は加添母音が採用されて、子音と母音の音素を組み合わせ単語単位で続け書きする方向へ進化していった。



ピットマンは16歳のころにテイラー式を学び、その後英語の初等教育に従事する中で、その速記技術を教えるようになっていた。速記教育に意欲的に従事するにつれて、学習材料を安価に入手しやすくする上で課題を抱えるに至った。その解決法が彼自身の発案による新式の速記法の創案であった。一般に速記法の設計は、創案者の創意工夫

ピットマン

で完全に独自の人工体系が整えられるというよりは、意図するしないにかかわらず既に習得した方式の線や筆記嗜好の影響を受ける傾向がある。

ピットマン式の基礎符号をテイラー式以前の英語速記法と比較してみたい。ウイリス、シェルトン、バイロム、テイラーとの対比を試みると、明らかにテイラー式の影響が見られる。子音のうち、テイラー式と同じ符号を充てたのは、f、n、t、vであり、これはバイロ、ができる。ピットマン式は、基礎符号の中に、ng、ch、sh（無声音）、SH（有声音）、th（無声音）、TH（有声音）の6符号を加え、のちの改訂ではgu、quにも特定の符号を与えた。母音の取り扱いについてピットマン式はテイラー式と同じ加点母音を採用している。

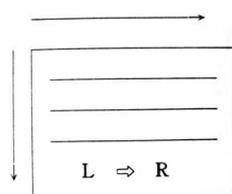
アイザック・ピットマンはみずから表音派理論を高度に完成したと述べているが、武部はそれに対して批判的である。（注2）

ピットマン式はハワード式を初め多くの派生方式を生んだが、日本語速記法へつながる派生方式としてアンドリュー・J・グラハム Andrew J. Graham のグラハム式がある。1900年初頭、アメリカの法廷速記者の半分（法廷速記者数635名中302名）を占める優位な方式として注目されたグラハム式は、アイザック・ピットマンの末弟、ベンジャミン・ピットマン Benjamin Pitman の影響を受けており、日本の田鎖綱紀はこのグラハム式を参照して日本語速記法の開発に取り組んだ。

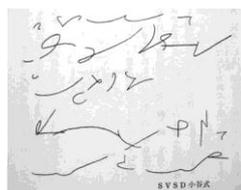
今日のピットマン式の理論構成を解説書「やさしい英文速記基礎編」（蝸牛社、1982年、津山千鶴子編訳）から見ると、P・B、T・D、K・G、M、N、ng、H、R、S・Z、F・V、th・TH、L、W、Y、ch・J、sh・zhの24符号、母音12を設定している。これらを補う第二符号としてフックのL、R、N、F、V、小円のS、ループのSTなどが設けられている。略記法としては、1/2に短線化してt、2倍の長線化によるter、der、ther、tureの表象など、ストロークに従属するサイン、加点サインによってよく出現する音群を簡潔に表記する縮略記法を用意しているほか、使用頻度が高い単語や定型句に略語と派生記号をつくっている。

5. 日本語への移植によって生じた変化

近代符号速記法は、受動的な環境で、あらゆる発言をありのままに固定するために速記符号の高速性と逐語性を備える符号派へと発展してきた。その符号研究と国字との関係で



Horizontal



い影響を与えた。

はその言語における文字言語の影響を強く受けてきた。符号以外にも、書字方向はその言語の文字習慣に基づいて行われる傾向があり、英語速記法の場合、左起右進横書きが主流であり、縦書き文化へ移転する際にもその書記方向が強い影響を与えた。

英語では速記アルファベットは最初、文字に対応して設計され、次に発音どおりに固定するために音素符号が開発された流れに並行して、高速度を追究して符号の筆画数を減少

させる単画化への方向性を示した。速記符号は、罫線ノートの罫線上にストロークを置いて加点母音や母音サインを連綴する形式で行われたが、次にはそれをゾーンの帯域上でストロークの長さを変化させる等によって音素、音節を表記する方向へ発展していった。

日本語の表音主義の速記法では、このような欧米語の速記の工夫を参照しながら日本語の特性に応じた縮記法、略記法、省記法によって、発言された言葉を示す速記符号を表記できる体系を整えている。ここで論じる日本語速記法における基礎符号の数は、一応五十音図で読みが使われている44音としている。

一方、符号派においては、発言事実に忠実に発言記録を作成するために、速記法体系は個別略語体系主体の比重を減少しながら、ミニマルペアのような音韻上の規則性、文法規則、言葉の発想メカニズムなど、その言語の法則性に基づいた省略、縮記体系が開発されてきた。

また、ピットマン式が絶対的な理想体系と位置づけられていたものの、日本語文字の筆記慣行から実際に筆記される速記符号は理想形態から離れていくことになった。ピットマン式が速記書で示した速記符号は知識として与えられるイメージであり、心象として記憶される。それは直線、曲線いずれも付属情報が付加されたあるべき姿であって、筆記によってあらわれる速記符号は手指、書き手の精神状態によって理想の心象とかなり違ってきてもおかしくない。しかし、この符号の崩れは解読できなくなるリスクを伴う。そこで、知識として示す符号の外見も崩れ要素を織り込んだ現実的な符号とする動きが次第に主流になってきている。田鎖式の派生方式である衆議院式標準速記法では、このようなあるべき姿を静態符号、一方現実に筆記される形を動態符号として、両者の関係を肯定的に認めて、反訳リスクを解決している。反面、中根式から派生した正円・楕円幾何派の国字式、山根式では動態符号を認めないため、リスクが顕在化するなど、課題も生んだ。

6. 日本語速記法へのピットマン式の影響

1) 田鎖式速記法の基礎符号とピットマン式の影響

田鎖式は、田鎖綱紀が1882年発表した速記法で、日本で実用化された最初の方式であった。一方、先行事例としてアメリカのリンズレー式を参照した速記法の書籍として、1882年9月、黒岩大、日置益訳補「議事演説討論傍聴筆記法」の著作権免許があり、翌年7月発行された。また1884年、清澤与十による「傍聴筆記新法独学」が発行された。田鎖による速記方式書は1885年2月の田鎖口述、丸山平次郎編纂の「日本傍聴筆記法」が最初のものとなる。



田鎖が1882年10月28日から指導した最初の速記符号は残されていない。受講生の一人、林茂淳はのちに「先生の定められた記号が屢々修正されるので、結構なことではあるが、折角覚えると変るので困った」(注3)という状態であった。ピットマン式はグラハム式を通じて速記線と音韻の関係を田鎖式へ伝わった。現在残されている最古の速

記符号をグラハム式と照らし合わせて、武部良明の推定した速記符号が田鎖式速記法の最初の符号とされている。田鎖は、グラハム式の子音符号から「K」を「か」、「S」を「さ」、「T」を「た」、「N」を「な」、「F」を「は」、「M」を「ま」、「R」を「ら」と、父音と呼ばれるあ列音へと導入した。音節文字体系の日本語に基礎符号を適応させるために、田鎖は父音ストロークと母音を組み合わせた符号を五十音に配置した。その方法としては、「い」「う」「え」「お」4母音に対するサイン符号を設定した。実際の符号の運用に当たっては楕円で閉める連続形を設けた。原理的には音素文字のように、ストローク、サインの2種の単位要素を使用して平仮名のように言葉を書きとめることが可能とされた。

このような田鎖式は、単位図形を2個消費することから複画派と呼ばれた。武部は「この方式のあ列音の父音符号は、Graham式の子音文字をそのまま直輸入したものと解されるわけである」と厳しく評価し「しかし田鎖氏にして見れば問題はその母音の表示法にあった。Pitman系の加点母音では、母音だけを独立させることが出来ない。しかるに日本語には母音のみより成る単語が決して少くないのである」。(注4) 田鎖式の母音は短線が割り当てられ、父音(あ列)符号に連続することによって子音(い列、う列、え列、お列)が導かれるという構成をとった点で、この母音の表象法はリンズレー式の連続母音の影響を見ないわけにいかない。

田鎖式は弟子の努力によって改良、実用化と高度化が図られていった。

2) ガントレット式速記法の基礎符号とピットマン式の影響

田鎖はピットマン式の派生方式グラハム式を参照にしたが、英国人エドワード・ガントレット George Edward Luckman Gauntlette は、英国で学んだピットマン式の経験を基に、ガントレット式日本語速記法を開発した。田鎖はピットマンと同様、子音へ配分したストローク符号が1種類の線長であったのに対して、ガントレットは線長を長短2種にふやすことに打開策を見出した。それによって、田鎖式では一筆で筆記できる符号があ列だけであったのに対して、もう1列を一筆で筆記することを可能にした。またストロークを連続する際に負担となる楕円のサインを減らして、早く、正確に筆記できる基礎符号を



つくり出すことに成功した。基礎符号に2種類の線を導入する発想はそれまで日本人研究者になかったため、画期的な発想として高く評価され、単画派への過渡的段階にあるとして折衷派と称された。ガントレットは田鎖と同様、ピットマン式の子音符号を音節符号のベースとして父音であるあ列に採用したが、「P」を「は」に、「R」の直線符号を「ら」へ配分し、「わ」へグラハム式の「W」とピットマン式の「W」を配分し、「や」にピットマン式の「th」(無声音)、「TH」(有声音)を配分するなどの変更を行った。その結果、ガントレット式は

ピットマン式から直接創案された派生方式となった。

ガントレットは、1890年カナダから来日し、東京高等商業学校、千葉中学校、東洋英和

中学校、麻布中学校、岡山第六中学校、金沢第四高等学校、山口高等商業学校等において語学を教授、千葉時代から日本語速記法の開発に着手、1899年「新式日本語速記術」を発行した。「私が千葉に居た時は割合に職務が閑散であったので、(中略)まだ青年で元気に満ちていた私は、無法にも、更に別な新式名日本語速記術を自分自身で発明して見ようと決心し、ピットマン氏の式を基礎として之に着手した」(注5)と回顧している。

ガントレットは教職に就いた学校で自式を余暇に指導した。ガントレット式で成功した速記者として森山富夫がよく知られ、田鎖式が独占していた国会の速記者採用試験に合格、他式者として初めて衆議院速記者となった。また藤田直助は田鎖式から方式転換に成功し、普及活動を始めたが、25歳で夭折した。ガントレット式は広く普及することはなかったが、その理論は折衷派の熊崎式に影響を与え、折衷式の早稲田式へも貢献することになった。

ガントレットは、ピットマンに敬意を払いながら、ピットマン式の日本語への翻案を行い、報告していたため、ピットマンはガントレットの業績を評価した。その結果、ピットマンはガントレット式の英文解説書「**Japanese Phonography**」を外国語速記法の一つとして出版したが、これは海外で発行された日本語速記法の最初とされている。

3) 武田式速記法の基礎符号とピットマン式の影響

武田千代三郎は五十音図にある日本語の基礎音をすべて1画で筆記する理想を求めて、



1904年田鎖式を起源とする複画派、ガントレット式を起源とする折衷派の次に出現する基礎符号は単画であることを示唆する見解を公表した。その間、武田は1903年官選山口県知事を辞任して1905年官選山梨県知事に就任するまでの間に、それまでに接したピットマン式を参考にして理想の速記基礎符号の開発に没頭しており、我が国初めての単画派を1905年に発表した。

武田は肉筆ノートの「武田式全画面速記法」において「これは英国速記学界の泰斗たるアイザック・ピットマン卿の定めたものに基づいて作ったのである」と断っている。(注6)

武田式は田鎖式的一种線、ガントレットの二種線に対して、三種線を導入したが、ピットマンの「K」を「か」、「S」を「さ」、「T」を「た」、「N」を「な」、「P」を「は」、「M」を「ま」、「L」を「や」、「R」を「ら」、「W」を「わ」へそれぞれ導入した。

武田はのちに神宮皇學館長、大阪市立高等商業学校校長など官職を重ねていったため、速記の研究、普及活動には従事できなかった。「それに対する他の質問すらも当時同式の研究者たりし衆議院速記技手長谷川篤に委して応答せしむると云うような訳であって、何等発達の途が講ぜられなかった。(中略)故に現今に至るまでに、武田式速記術を標榜して立って居る技術者は、当時同邸に寄寓して居って其教を受けた赤根谷友三郎唯一人あるのみである」。(注7)。40年ほど前には中央大学事務局卿速記職員、佐藤久二男が武田式速記法を書いたという報告もあるが(注8)、数人の人材は出たものの、広がることがなかった。

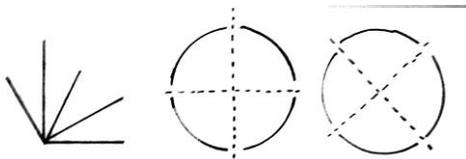
4) 中根式速記法の基礎符号とピットマン式の影響

中根正親は第三高等学校在学中に京都帝国大学嘱託速記者、松川梅軒の英文速記練習の読み手を引き受けた際にピットマン式に接し、それまでの複画派の分析から折衷派の学習を試みたのち、独創的な単画派の開発に挑戦した。その際、ピットマン式から正円幾何派の符号図形要素を導入し、五十音図に配分した。ピットマン式は4度日本語へ適応される中で、中根式速記法の基礎符号でピットマン式の影響を受けたものは、**K**を「か」、**N**を「な」、**M**を「ま」とするにとどまった。覚えやすさ、書きやすさ、高速性、正確性という速記方式の要求項目の多くを達成するために、日本語の特徴分析を基に、マクロな視点から速記理論体系を構築した。しかし、中根式は、田鎖式、ガントレット式がピットマン式の符号の絶対神聖性を疑わなかったのに対して、自由な配分を実現した。それは反面、「な」・「に」、「ま」・「み」など、正円幾何派符号の弱みを強調する面を生じた。



5) ダイアグラムズの継承

符号速記法の基礎符号はダイアグラムズから創出される。幾何派においては正円と角度・方向を定義したダイアグラムズの一部の曲線、直線から取り出されている。ピットマン式における図のようなダイアグラムズが定義されている。創案当時の田鎖式、ガントレット式、武田式、中根式は、基礎符号を割り出すダイアグラムズをピットマン式の四分円と方角図を前提とした。田鎖式が参照したグラハム式もピットマンと同じダイアグラムズを使用したのので、これらの方式は同じ正円幾何派の基礎符号であった。これによってピットマニックであることがわかる。ただ、その後符号の大きさ、筆記具の変化などによって、中根式は方角図の角度規定の一部を変更した。(注9)



ピットマン式速記法のダイアグラムズ

基礎符号を設計するに当たって、田鎖式速記法ではあいうえお五十音に対して基礎符号を設けたが、その際五十音表の母音について短線を配分し、あ列音を父音として設定した。そして父音と母音を組み合わせることによって、それ以外の子音を導く原理をとった。そこでピットマン式の速記アルファベットと田鎖式、ガントレット式、武田式の基礎符号の父音を比較すると、ピットマン式の「**K**」を「か」、「**S**」を「さ」、「**T**」を「た」、「**N**」を「な」、「**F**」を「は」、「**M**」を「ま」、「**R**」を「ら」、「**G**」を「が」、「**Z**」を「ざ」、「**D**」を「だ」、「**V**」を「ば」へ導入し、ガントレット式、武田式はピットマンの「**W**」を「わ」に、それぞれ用いた。一方、中根式はピットマン式の「**K**」を「か」、「**N**」を「な」、「**M**」を「ま」に取り入れただけで、残りは異なる図形資源を配当した。

基礎符号の図形属性を整理すると、「**K** [か]は直線、淡線、短線、単線、水平であり、「**S**

「さ」は曲線、淡線、短線、単線、右回り、垂直（中根式では右下方 60 度）、「T」[た]は直線、淡線、短線、単線、垂直（中根式は右下方 60 度）、「N」「な」は曲線、淡線、短線、単線、水平、左回り、「M」「ま」は曲線、淡線、短線、単線、水平、右回り、「R」「ら」は曲線・直線、淡線、単線、右回り、右下 60 度・左上 30 度などとなっている。

7. 日本語への適応上で考案された独自の成果

ガントレットは日本語の速記法を開発する際、チクシ法と呼ばれる音韻法則を設けた点で、後世の速記研究者に多大の影響を与えた。チクシ法というのは、「チ」「ク」「シ」の 3 音のどれかが一語の第二音に出現するとき「チクシ」を略記する方法である。のちに中根正親が字音語の縮記法「インツクキ法」として体系化しており、この法則は漢字の音構造が「愛妻」(○イ○イ)「安心」(○ン○ン)、「国会」(○ク○イ=○ッ○イ)、「確立」(○ク○ツ)、「社会」(○ヤ○イ)、「高等」(○ウ○ウ)のように、/○(インツクキキャウ)+○インツクキキャウ/の音構造において「インツクキキャウ」の 10 文字が尾音としてあらわれることを発見し、速記法へ応用したものである。

英語と違って、日本語では「男」/otoko/、「心」/kokoro/、「浅間山」/asamayama/のように比較的同じ母音が並ぶことも音韻構造の特徴であり、これを基に森卓明は大和言葉の縮記法として「和語縮字法」を考案した。

ほかにも、ピットマン式の符号イメージを目標にして、ピットマン式の線処理方法を取り入れる研究が行われた。例えば中根式ではピットマン式にある短線をより短く、長線をより長くして音負荷を増す理論を R 尾音の縮記法として応用したり、ピットマン式の加點母音を加點インツクキへ応用する試みが行われた。

またピットマン式のゾーン母音表象理論を取り入れる研究などが、森卓明、植田裕によって行われた。ピットマンは速記符号を完全な表音記号として完成する理想を抱いていたが、日本語速記法では高速性と逐語性の改善の犠牲として一符号多読化へ進み、同じ符号を意味や文脈から読み分けるという研究が行われた。

8. おわりに

ピットマン式を理想とする正円幾何派が日本へ導入され、高速度、学習性、書きやすさなどを改善するため、日本語の音韻特性や語の相互関係を利用して簡単に筆記する方法が研究されて、正円幾何派は日本独特の発展を遂げた。その特徴的な事例としては折衷式の早稲田式では早期には正円幾何符号のダイヤグラムズを使用していたのが、今日はダイヤグラムズを用いなくなっている。そして速記符号のモデルを日本の文字の筆法をベースにしたスクリプトへ置き換えている。

ほかの単画派方式においても、指導する際のモデル符号は理念符号としての静態符号が用いられるものの、筆記では動態化した符号を書くことが通常となっている。その結果、今日、日本語速記法における正円幾何派はその内容が大きく変質している。草書派、半草

書派、文字派が実質的に使用されていない中で、正円幾何派だけが存在するという認識はその内容の変化から、既にこのような方式分類は意味を持たなくなっている。

また、単画派至上主義で発達してきた日本語の速記法は、基礎符号がすべての原点ではなく、日本語の言語特性に対応して符号資源の最適配分が行われ、総体として言葉を巧みに符号でとらえる仕組みこそが大切だという価値観の変化を示している。

以上

注1 国語速記概説(上)、武部良明、49p、「第三章速記技術第一節速記と速記技術、速記技術は要するに音声による言語表出を文字化する技術である。従ってそれは別に速記方式というものをいなくても可能なのである。たとえば、音声による言語表出を一言一句その通りその場で記憶してしまい、あとでそれを一言一句その通り文字で書けるだけの速度で少しづつ思い出しながら文字化すればよいのである。略」

注2 国語速記概説(上)、武部良明、17p、「しかしながら、英国の音声学も正音学者としては Pitman 式の基礎とした Walker あたりが最後であり、やがて音声学者としての A. J. Ellis, A. M. Bell、H. Sweet などが現われた。一方、大陸においては実験を主とする音声学が発達した。1886 年には国際音声学協会が生まれた。このような新しい基礎に基づく英語音声学によれば、Pitman 式における音の扱い方は必ずしも音声学的でないことがわかった。たとえば、Pitman 式は [i:]、[i]、[C の逆さま]、[c の逆さま:]、[u:]、[u] をそれぞれ長母音、短母音の対としていながら、[ei]、[e]、[ou]、[Λ] も同じような対としている。[ai]、[au]、[c の逆さま i] とともに [ju:] を二重母音的に扱い、二重母音たる [ei]、[ou] は、[e]、[Λ] のの長母音としている。また [e の逆さま] を母音的でなく子音 [r] として扱っている。それにもかかわらず Pitman 式は、この点に関して改めようとしなかった。それは、すでに、速字が発音の微細な違いを表記するに及ばないと考えられていたからである。」

注3 日本速記方式発達史、日本速記協会、1934年、18P

注4 以上、日本速記方式発達史、日本書房、武部良明、31-32p

注5 日本速記方式発達史、日本書房、武部良明、47p

注6 日本速記方式発達史、日本書房、武部良明、54p

注7 日本速記五十年史、1934年、日本速記協会、60p

注8 この項、菅原登氏

注9 速記研究 48号5ページ、森卓明、1934年2月1日

(故臼田昭氏の翻訳「ピープス氏の日記」の最後のページから)

自分の目で日記がつけられるのは、おそらくこれでおしまいだろう。もうこれ以上は続けられないのだ。これまで長い間、ほとんどペンを手に持つたびに目をだめにしてきたのだから。それゆえ、今後はどうなろうと、諦めなければならない。この先は部下に普通の字で書かせようと決心している。だから彼らや世間の人に知られてもよいことしか書かないということに満足しなければならない。ひょっとして何かあったときには（それもそう多くはないはずだ。今やデブとの色事も終わったし、他の快樂のほとんどすべても、目に差しつかえがあるのだから）、日記帳に欄外を空けておいて、そこここに自分で速記記号の注釈をつけ加えるより仕方がない。そういう訳でこうなった次第であるが、まるで自分自身が墓の中へはいつて行くのを見るような気がする――そのことに対し、そしてまた失明に伴うすべての不便に対し、善き神よ、わたしに心構えをなさしめ給え。

1669年5月31日

S P

Samuel Pepys : diary

End of the Entry for May 31, 1669

And thus ends all that I doubt I shall ever be able to do with my own eyes in the keeping of my journal, I being not able to do it any longer, having done now so long as to undo my eyes almost every time that I take a pen in my hand ; and therefore resolve from this time forward to have it kept by my people in longhand, and must therefore

1 be contented to set down no more than is fit for them
2 and all the world to know ; or if there be anything
3 (which cannot be much, now my amours to Deb are
4 past, and my eyes hindering me in almost all other
5 pleasures), I must endeavour to keep a margin in my
6 book open, and to add here and there a note in short-
7 hand with my own hand. And so I betake myself to that
8 course which (is) almost as much as to see myself go into
9 my grave - for which and all the discomforts that will
10 accompany my being blind, the good God prepare me.